明治期落語速記にみえる指定表現の体系について

寺田　智美

【キーワード】指定表現・落語速記・待遇表現・階層差・職業差

0　はじめに

落語にはさまざまな階層や職業の人々が登場し、落語家はそれぞれの人物に応じて声色や言葉づかいを変え、それらしく聞こえるように演じ分けていく。そこに表れた「それらしさ」には、当時の人々が実際に用いた言葉の特徴が映し出されていると考えることができる。

そこで明治中期～後期の落語速記をテキストとして用い（注1）、当時の人々の言葉が階層や職業によってどのように違っていたのかを探ってみたいと思う。本稿ではさまざまな表現の中から特に指定表現に注目して考察し、その体系をみていく。

1　使用した資料と分析方法

1-1　使用した資料

明治期の言葉を研究するための資料として、『口演速記　明治大正落語集成』（暉峻康隆・興津要・榎本滋民編、全7巻、講談社、1980～1981）に収録されている落語速記を使用した。この資料には「百花園」「文芸倶楽部」などの雑誌に掲載された落語速記422席が収録されているが、本稿ではその中から①明治期に東京の落語家によって口演され、②時代設定が江戸時代でないもの、という二条件を満たす88席を使用した。

実際に使用した落語速記は以下のとおりである。なお、丸数字は「～代目」、ハイフンの後の数字は初出雑誌（注2）の刊行年（いずれも元号は明治）を示す。

「成田小僧」	三遊亭円遊③-22	「小言幸兵衛」	古今亭今輔②-22
「成田小僧（下の巻）」	三遊亭円遊③-23	「転宅」	古今亭今輔②-22
「乾物箱」	三遊亭円遊③-22	「姫かたり」	三遊亭円遊③-23
「鼻毛」	三遊亭円遊③-22	「恵方詣」	三遊亭円遊③-23
「思案の外幇間の当込み」	三遊亭円遊③-22	「樟脳玉」	古今亭今輔②-23
		「樟脳玉（下の巻）」	三遊亭円遊③-24
「隅田の馴染め」	三遊亭円遊③-22	「入れ髪」	三遊亭円遊③-23
「お節徳三郎 恋の仮名文」	禽語楼小さん-22	「星野屋」	春風亭柳枝③-26
		「閉込み」	柳家小さん③-30
「船徳」	三遊亭円遊③-22	「つよがり」	三遊亭円遊③-23
「王子の幇間」	三遊亭円遊③-22	「臑咬り（すねかじり）」	

三遊亭円遊③-23
「素人洋食」　三遊亭円遊③-24
「ズッコケ」　三遊亭円遊③-24
「穴蔵の泥棒」　三遊亭円遊③-24
「三年目の幽霊」　三遊亭円遊③-24
「素人鰻」　三遊亭円遊③-24
「道具の開業」　三遊亭円遊③-24
「不貞妻」　三遊亭円遊③-25
「品川情死(しんぢう)下の巻」
三遊亭遊三①-25
「西京土産」　三遊亭円遊③-25
「小夜千鳥」　禽語楼小さん-25
「金の味」　三遊亭円遊③-25
「弁天詣り」　三遊亭円遊③-26
「お釣りの情夫(まおとこ)」
三遊亭円遊③-26
「ダクダク」　三遊亭円遊③-26
「梅見の薬鑵」　三遊亭円遊③-26
「素人人力」　三遊亭円遊③-26
「果報の遊客」　三遊亭円遊③-26
「湯屋番」　三遊亭円遊③-26
「幇間針」　禽語楼小さん-27
「無学者論」　禽語楼小さん-27
「猫久」　禽語楼小さん-27
「親の無筆」　禽語楼小さん-28
「無筆」　柳家小さん③-29
「附馬の附馬」　橘家円喬④-28
「牛褒め」　橘家円喬④-29
「出来心」　柳家小さん③-29
「汲立て」　橘家円蔵④-30
「昔の詐偽」　春風亭柳枝③-30
「春の新築」　三遊亭円遊③-31
「旅順の釣上げ」　三遊亭円遊③-31
「正直」　春風亭柳枝③-31
「新治療」　三遊亭小円遊-31
「犬の目」　橘家円蔵④-31
「松竹梅」　柳亭左楽④-31
「御船の戦争」　桂文治⑥-32
「夢路の風」　春風亭小柳枝③-32
「痴話喧嘩」　三遊亭金馬①-32
「子供の洋行」　三遊亭円左①-32
「松竹梅」　三遊亭円左①-32
「心の眼」　三遊亭金馬①-32
「革衣」　三遊亭円左①-32
「大豆粉の牡丹餅」　三遊亭金馬①-32
「新聞記者」　三遊亭円左①-32
「探偵饂飩」　三遊亭金馬①-33
「汽車の白浪」　桂文治⑥-33
「鸚鵡の徳利」　桂文楽⑤-33
「写真の指傷」　三遊亭円左①-33
「たぬき娘」　三遊亭円左①-33
「はなむけ」　三遊亭金馬①-33
「蚊帳の紐」　桂文治⑥-33
「旦那の羽織」　三遊亭円左①-33
「通夜の饒舌」　三遊亭円左①-33
「裏の裡愛妾の肚」　翁家さん馬⑤-22
「辰巳の辻占」　橘家円喬④-29
「仏だん」　三遊亭円馬②-29
「眉間尺」　三遊亭円馬②-29
「世界一周」　談州楼燕枝①-33
「太田道灌」　桂文治⑥-35
「よかちょろ」　三遊亭遊三①-40
「お文様」
三遊亭小円朝②＝三遊亭金馬①-40
「子宝」　三遊亭円馬②-40
「安産」　橘家円蔵④-41
「六尺棒」　三遊亭遊三①-41
「夏どろ」　柳家小さん③-42
「お茶くみ」　柳家小せん①-42
「三夫婦」　橘家円喬④-45
「子別れ」　柳家小さん③-45
「小いな」　柳家小さん③-4

1-2　分析方法

従来、待遇表現の体系を分析するためにさまざまな方法が試みられ、成果をあげてきた。例えば山崎 1963、1990 や小島 1974 は、言葉をその敬意の度合いによって分類し、主語（人称代名詞）と述語（尊敬語・謙譲語など）との関係を中心に分析を行ったし、櫻井 1966 は『官職要解』によってまず人物を段階分けし、聞き手中心の分析をした。また飛田 1970 や鈴木 1973 は、士農工商などの身分制度を利用して、明らかに上下関係にある人物の表現から各表現の敬意の度合いを決定し、各位相の話し手が使用する表現の差について分析を行っている。しかしこれらの方法には欠点がないわけではない。言葉あるいは登場人物を分類するときの根拠が明確でなかったり、明治後期の言葉の分析に適用するには無理があるなど、問題点も少なからず存在するのである（注3）。そこで、登場人物の上下関係をできるだけ客観的に決定するために、以下のような方法を試みた。

1　登場人物を階層、職業別に分類する：資料に登場する人物を次のA～Hグループに分類した。

A　士族・貴族・官吏など社会的地位が高いと思われる人物。
(男)士族、華族、大臣、学者、医者、軍人、警察、僧など
(女)士族の妻、令嬢など

B　奉公人などを使用する立場の人物。
(男)旦那、若旦那、若旦那の伯父、大商人など
(女)旦那の妻、若旦那の妻、旦那の娘、大商人の妻など

C　旦那などに使われる立場の人物。
(男)番頭、小僧、若い衆、権助、奉公人、華族家来など
(女)女中、腰元など

D　その他使われる立場の人物。
(男)たいこもち、按摩など　(女)たいこもちの妻、按摩の妻など

E　長屋・職人関係で上に立つ立場の人物。
(男)大家、職人親方、長屋の隠居など
(女)大家の妻、職人親方の妻、長屋の住人（老婆）など

F　長屋・職人関係で上に立たない立場の人物。
(男)長屋の住人、長屋の子、職人、職人の子、職人の息子、商人など
(女)長屋の住人の妻、職人の妻、職人の母、商人の妻など

G　花魁、芸者など遊廓関係の人物（女性のみ)。
(女)花魁、花魁の母、芸者、芸者の母、妾、妾の母など

H　A～Gのグループに分類できなかった登場人物。
(男)客、記者、書生、賊、乞食など　(女)産婆、乳母、乞食、師匠など

なおHグループにはA～Gのグループに分類できなかった人物だけでなく、内容からグループが特定できなかった人物も含まれている。このグループはさまざ

まな階層・職業の人物が混在しているため、本稿では分析から除外した。

【表1】
各指定表現の使用度数

指定表現	度数
だ	3519
です	741
でございます	626
でげす	344
じゃ	44
である	31
でがす	18
であります	14
でえ	14
でござります	10
でござる	10
でごぜいます	7
だす	6
でござんす	4
でありやす	1
でおます	1
でございます	1
合計	5391

2 次に、A～Gのそれぞれの間でかわされる会話の中から指定表現を抽出、集計する。(→【表１】)

・抽出する際、聞き手が複数のグループや性別にまたがるもの、独り言、および「でない・でありません・じゃない」などの打消を伴う形は数えなかった。(注４)

・「だから・ですから」「だが・ですが」の類は数に数えた。(注５)

3 各グループの全体に対して「だ・です・でございます」とそれ以外の指定表現がどれだけ使われているか（＝使用率）を集計する。(→【表２】)

・「だ・です・でございます」だけ別にしたのは、分析対象となる全指定表現の中でも目立って使用頻度が高く、かつほとんどすべてのグループから使用例が得られたからである。「でげす」も使用頻度は高いが、特定のグループの使用例しか得られなかったので「その他」に含めた。

4 【表１】の結果から「だ」「です」「でございます」の使用率を算出し、「だ」は使われない順、「です」「でございます」は使われる順に並べ、それぞれの順位をつけ、その順位の平均値を算出して最終順位を決定する。(→【表２】)

・「だ」は「です」「でございます」よりも敬意の度合いが低いと考え、「だ」の使用率が低ければ低いほどグループの順位が高くなると判断した。

【表2】聞き手に対する指定表現の使用状況

聞き手↓	使用度数 だ	使用度数 です	使用度数 でございます	使用度数 その他	使用度数 計	使用率(%) だ	使用率(%) です	使用率(%) でございます	使用率(%) その他	順位 だ昇順	順位 です降順	順位 でございます降順	順位 平均順位	順位 総合順位
A	59	67	115	41	282	20.9	23.8	40.8	14.5	1	2	1	1.3	1
B	556	237	271	255	1319	42.2	18.0	20.5	19.3	3	3	2	2.7	3
C	603	42	24	34	703	85.8	6.0	3.4	4.8	6	6	6	6.0	6
D	356	34	7	9	406	87.7	8.4	1.7	2.2	7	5	7	6.3	7
E	166	215	80	68	529	31.4	40.6	15.1	12.9	2	1	3	2.0	2
F	1608	107	113	83	1911	84.1	5.6	5.9	4.3	5	7	5	5.7	5
G	171	39	18	15	241	80.0	16.9	8.6	8.2	4	4	4	4.0	4

このように「だ」の使用率に着目した結果、各グループ間の上下関係は次のように位置づけられた。

第Ⅰグループ→A　士族・貴族・官吏など社会的地位が高いと思われる人物
第Ⅱグループ→E　長屋・職人関係で上に立つ立場の人物
第Ⅲグループ→B　奉公人などを使用する立場の人物
第Ⅳグループ→G　花魁、芸者など遊廓関係の人物（女性のみ）
第Ⅴグループ→F　長屋・職人関係で上に立たない立場の人物
第Ⅵグループ→C　旦那などに使われる立場の人物
第Ⅶグループ→D　その他使われる立場の人物

この順位は、当時の社会的な上下関係と食い違う部分があると思われる。例えば第Ⅱグループと第Ⅲグループは順序が逆であってもおかしくない。これは誰との会話が多いのかということが各グループによって異なるために生じたものであると考えられる。

2　各グループにみられる指定表現

2-0　各グループ別指定表現の使用度数

各グループの指定表現の使用状況をみていく前に、全体の傾向をみるためにグループ別に指定表現を集計した表（→【表3】）を示しておく。【表3】から、使用度数の差があるにせよ、「だ・です・でございます」がどのグループも使いうる一般的な指定表現であることがわかる。それに対して「だ・です・でございます」以外の指定表現はその使用状況にばらつきがあり、各グループの特徴が現れている部分だと考えられる。以下、各グループごとに特徴的な表現を考察していく。

【表3】各指定表現の話し手別使用度数

指定表現＼話し手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	合計
だ	153	571	1034	123	1194	289	155	3519
です	26	52	102	56	286	122	97	741
でございます	16	35	102	32	236	127	76	626
でげす	9	28	31		59	43	174	344
じゃ	33		7	2	1	1		44
である	17	6	4		3	1		31
でがす					9	9		18
であります			4		5		5	14
でえ		1	1		11	1		14
でございます	2				4	2	2	10
でござる	8					1	1	10
でございます					7			7
だす				1			5	6
でござんす			1		3			4
でありやす					1			1
でおます							1	1
でございます			1					1
合計	264	693	1287	214	1821	596	516	5391

2-1　第Ⅰグループ（士族・貴族・官吏など社会的地位が高いと思われる人物）の指定表現

【表4】第Ⅰグループの指定表現

男性→男性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	6	32	21	39	14		112
です	2	3	9	4	1		19
でございます	7		2	2	1		12
でげす			*8*				8
じゃ	4	2		*18*			24
である	4	*8*		5	1		18
でござる	*6*	1		1			8
計	29	44	40	69	17	0	199

男性→女性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	10		3	2	14	5		34
です					3			3
でございます					1			1
でげす						*1*		1
じゃ					9			9
である					1			1
でございます					*2*			2
計	10	0	3	2	30	6	0	51

男性は、表現の種類は多い方ではないが、他のグループと比較して「じゃ・である・でござる」の用例が多くみられた。女性には特徴的な表現はみられなかった。以下、用例を挙げる（注6）。

○聞く所に依れば何うも容易ならん怪妙の御話ぢやの。　［士族→熊（Ⅴ長屋の住人）猫久］

○今調べたら木（き）〈ママ〉豆粉（なこ）が皆な猫（ねこ）（猫）であツた哩（わい）。　［警察→大家（Ⅱ）大豆粉の牡丹餅］

○その様な策を云ふて生命を助かろうとは横着な奴でござる。　［香田（軍人）→軍人（Ⅰ）御船の戦争］

○お前さんから百円の金を請取ツて来いと申されましたが、如何でございますか。　［僧→鉄（Ⅴ職人の妻）大豆粉の牡丹餅］

なお「でげす」が全部で9例みえるが、話し手はすべて医者で、うち8例が『乾物箱』に登場する医者、

女性→男性

聞き手＼指定表現	I	II	III	V	VI	VII	計
だ	3			4			7
です	4						4
でございます	3						3
計	10	0	0	4	0	0	14

竹庵の台詞である。

○尊公(あなた)は花魁の処へ往くんでゲス。

［竹庵（医者）→金之助（III若旦那）乾物箱］

また竹庵以外の医者の台詞は次の例である。

○でげすかナ…どうも是は大変な事に成ましたなア…

［医者→沖の井（VI腰元）姫かたり］

『乾物箱』に登場する医者は、内容から判断してたいこもちに限りなく近い、いわば「藪医者」であって、このグループでは例外的な扱いとするべきであろう。

■第Ⅰグループの指定表現体系

※順番は用例の多い順。（　）内は例外と判断したもの。以下同じ。

男性＝だ・です・でございます・じゃ・である・でござる・でございます（×でげす）

女性＝だ・です・でございます

2-2　第Ⅱグループ（長屋・職人関係で上に立つ立場の人物）の指定表現

【表5】第Ⅱグループの指定表現

男性→男性

聞き手＼指定表現	I	II	III	V	VI	VII	計
だ	5		13	433	29	1	481
です	17		7	14	1		39
でございます	14			7	9		30
でげす	7		7	6	*6*		26
である				*6*			6
でえ				*1*			1
計	43	0	27	467	47	1	585

男性→女性

聞き手＼指定表現	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
だ		14		22	5	1		42
です				1				1
計	0	14	0	23	5	1	0	43

女性→男性

聞き手＼指定表現	I	II	III	V	VI	VII	計
だ		3		15	3	10	31
です		2	1		6		9
でございます			2		2		4
計	0	5	3	15	11	10	44

女性→女性

聞き手＼指定表現	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
だ					17			17
です					3			3
でございます					1			1
計	0	0	0	0	21	0	0	21

男性は他のグループと比べて最も表現の種類が乏しいが、「である」の用例数は最も多く得られた。女性の表現には特に目立った特徴はない。

○ヘエ、ぢやア何でげすか、お通夜は一晩賑やかでございましたらうねえ。

［親方→若い衆（VI）　附馬の附馬］

○お道具は汚れ目も立ず、また残つたのは仕舞つて置(また)いて今度復出しても宜いものである。

［大家→長屋の住人（V）道具の開業］

○何を泣きやアがるんでへ、外見無(みっともね)へ……

［親方→民（V職人）品川情死下の巻］

■第Ⅱグループの指定表現体系

男性＝だ・です・でございます・でげす・である・でえ

女性＝だ・です・でございます

2-3　第Ⅲグループ（奉公人などを使用する立場の人物）の指定表現

男性にみられる「でございます」はわずか1例ではあるが、他のグループにはみられない表現である。女性には特徴はみられない。

○私は家の飯を減さんで腹を満腹(くち)く為る事を考へましたが、農商務省へ願うと思つて居るんでゲス…　[若旦那→亭主（Ⅲ）素人人力]

○私(わし)イ、貴君(あんた)さんが盗賊(どろぼう)ぢやと思ふた…

[小林（大商人）→刑事（Ⅰ）汽車の白浪]

【表6】第Ⅲグループの指定表現

男性→男性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	18	13	154	45	256	206	692
です	7	5	34	5	3	2	56
でございます			55				55
でげす	1	4	20	1		1	27
じゃ	4		1		1		6
である			2		1		3
であります			4				4
でえ					1		1
でござんす			1				1
でございます			1				1
計	30	22	272	51	262	209	846

男性→女性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ		1	116	66	4	30		217
です		1	1	1				3
でございます		1	1					2
でげす			3	1				4
じゃ						1		1
である				1				1
計	0	3	121	69	4	31	0	228

女性→男性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ			16		31	27	74
です	1		33	2	1	2	39
でございます	9		32			1	42
計	10	0	81	2	32	30	155

女性→女性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ			7	2		42		51
です				4				4
でございます				3				3
計	0	0	7	9	0	42	0	58

○処が遊び先であつたから、遊び先から申して遣したら却つて乃父(おとっ)さんが御立腹にならうと斯う存じまして、　[倅（若旦那）→父（Ⅲ旦那）よかちょろ]

○只今此方へお潜りになつた彼の門は毘沙門と云ふので有りますよ。[大黒屋槌右衛門（大商人）→福徳屋万兵衛（Ⅲ大商人）春の新築]

○チヨツ、何にがお気の毒でエ。

[旦那→小僧（Ⅵ）成田小僧]

○御免なさいまし、伯父さん御在宅でござんすか。

[猪之（若旦那）→猪之の伯父（Ⅲ若旦那の伯父）辰巳の辻占]

○けれども親父さん此所で生れて此の家を他人に取られるのは、如何にも残念でございますから、諦らめの為めに燃して了ひますよ。

[若旦那→旦那（Ⅲ）六尺棒]

■第Ⅲグループの指定表現体系

男性＝だ・です・でございます・でげす・じゃ・である・であります・でえ・でござんす・でございます

女性＝だ・です・でございます

2-4　第Ⅳグループ（花魁・芸者など遊廓関係の人物）の指定表現

【表7】第Ⅳグループの指定表現

女性→男性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	1	5	13		11	14	50	94
です	3	4	21		2	3	21	54
でございます	1	1	20			2	5	29
じゃ			1	1				2
だす			1					1
計	5	10	56		14	19	76	180

女性→女性

聞き手＼指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ				27		2		29
です							2	2
でございます				3				3
計	0	0	0	30	0	2	2	34

用例数は少ないが、他のグループの女性にはみられない「じゃ」「だす」が使われている。いわゆる「アリンス言葉」の類はみられなかったが、このグループの女性が他とは異なる言葉を使う傾向にあることがうかがえる。

○妾(あたい)は真正(ほんま)の人間ぢやわい……

[花魁（Ⅳ）→作蔵、屑屋（Ⅴ商人）西京土産]

○貴郎若(あんたもし)も病気にでもなつたならば、妾本間(わたへほんま)に心配だすは、ドウしたのい。

[花魁（Ⅳ）→猪之（Ⅲ若旦那）辰巳の辻占]

■第Ⅳグループの指定表現体系

だ・です・でございます・じゃ・だす

2-5　第Ⅴグループ（長屋・職人関係で上に立たない立場の人物）の指定表現

このグループの男性はもっとも表現の種類が豊富で、「でごぜいます・でありやす」はこのグループの他ではみられない表現である。女性は、第Ⅳグループ以外では唯一、「だ・です・でございます」以外の用例を得ることができた。

○実は此ン畜生奴グズグズ云ふので一人で此の仕事を受合ふてエもんでげすから、何為たんでげすが貴所（あなた）のお目に這入たんでげせう。

［船頭→亭主（Ⅱ職人親方）船徳］

【表8】第Ⅴグループの指定表現

男性→男性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	7	66	38	596	37	2	746
です	10	186	9	35	1		241
でございます	57	51	13	68	3		192
でげす	2	31	7	8			48
じゃ				1			1
である		1					1
でがす		9					9
であります	2	2		1			5
でえ		1		7	1		9
でござります		3					3
でございます	6			1			7
でござんす		2		1			3
でありやす				1			1
計	84	352	67	719	42	2	1266

男性→女性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	1	3		23	221	6		254
です	2			1	5	5		13
でございます	1	1	4	4	12	3		25
でげす	2				1	8		11
である					1			1
でえ				1	1			2
でござります	1							1
計	7	4	4	29	241	22	0	307

女性→男性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ	2	2		188		1	193
です	4		3	16			23
でございます	14	4	1				19
である				1			1
計	20	6	4	205	0	1	236

女性→女性

指定表現＼聞き手	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ		1						1
です		9						9
でございます		2						2
計	0	12	0	0	0	0	0	12

○やみ眼ぢや……

［辰（長屋の住人）→源（Ⅴ長屋の住人）犬の目］

○海は畳を敷たる如く、油を流したりと思はれる程であるのに、［秀（長屋の住人）→御隠居（Ⅱ長屋の隠居）世界一周］

○それぢやア上野と日光と何方が本統でがす。

［熊（長屋の住人）→隠居（Ⅱ長屋の隠居）太田道灌］

○尤も馴染の客で有りますから話は附きました様な者の、一時は其方へ対しても気の毒な訳で御坐います。　［男（商人）→医者（Ⅰ）昔の詐偽］

○ヤイヤイ何処へ行きやアがるんでへ。

［親（長屋の住人）→子（Ⅴ長屋の住人）無筆］

○エー彼の十円御借り申した彼の時は、節句前で御坐りましたから十軒店に雛の店を出しました。

［与太郎（長屋の住人）→差配（Ⅱ大家）道具の開業］

○猫の嚊（かか）アなんぞは感心なものでごぜいますねへ。

［熊（長屋の住人）→士族（Ⅰ）猫久］

○へー四天王といやア四つでござんすね。

［熊（長屋の住人）→隠居（Ⅱ長屋の隠居）太田道灌］

○さて、諸君の前でありやすが、是からその腰フラの原因に相成りやす。

［松（長屋の住人）→辰（Ⅲ長屋の住人）お茶くみ］

○倅（せがれ）、妾（わたし）が毎度家内を貰へ貰へと云ふのに聞入ないで此母に内分（ないしょ）で貰ふとは何事で有る。

［商人の母→作蔵（Ⅴ屑屋）西京土産］

■第Ⅴグループの指定表現体系

男性＝だ・です・でございます・でげす・じゃ・である・でがす・

であります・でえ・でございます・でごぜいます・でござんす・でありやす

女性＝だ・です・でございます・である

2-6　第VIグループ（旦那などに使われる立場の人物）の指定表現

このグループだけにみられる特徴的な表現というものはない。「じゃ・でえ・でござる」はいずれも1例ずつしかないが、すべて早野蒸気という華族家来の台詞から得られた用例であり、「じゃ・ござる」に関してはこのグループ内で唯一第Iグループの特徴を備えているために特に異質な印象を受ける。このグループの体系からははずすべきであろう。

【表9】第VIグループの指定表現

男性→男性

指定表現＼聞き手	I	II	III	V	VI	VII	計
だ	5	6	89	6	53	2	161
です	4	2	43	1	6		56
でございます	8	17	43	3	2		73
でげす	1	2	*38*	1	1	1	42
じゃ		*1*					1
である			*1*				1
でがす			2				2
でえ					*1*		1
でございます		*1*	1				2
でござる	*1*						1
計	19	29	215	11	63	3	340

男性→女性

指定表現＼聞き手	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
だ		19	25	3		42		89
です		2		6		8		16
でございます		2	3	1				6
でげす						1		1
でがす			*6*			1		7
計	0	23	34	10	0	52	0	119

女性→男性

指定表現＼聞き手	I	II	III	V	VI	VII	計
だ	1		2	2	30	1	36
です	6		5	16	2	5	34
でございます			7	18		1	26
計	7	0	14	36	32	7	96

女性→女性

指定表現＼聞き手	I	II	III	IV	V	VI	VII	計
だ			3					3
です	7		9					16
でございます	1		21					22
計	8	0	33	0	0	0	0	41

○他に妾（わたし）の手を押さへて呉れる人が多勢居るからッてエんでげすが私と徳どんと二人切りでせう。

［小僧→旦那（III）お節徳三郎恋の仮名文］

○此近辺に名医が有るなら案内を為て貰うと存じ、聞きに参たのぢや。［早野蒸気（華族家来）→竹内金太郎（II職人親方）姫かたり］

○縁が切れれば真（あか）の他人、此方は切ても切れぬ御子息様であれば、御子息様の方が御（お）大切でございます。［番頭→旦那（III）仏だん］

○何うでエ仁公。最う斯うやつて金を此方へ巻揚げて仕舞へば此方のものだ。

［早野蒸気（華族家来）→若い衆（VI）姫かたり］

○是は大層早い御帰りで御座ります。

［番頭→旦那（II）仏だん］

○未だ御婚礼前の姫（ひい）さまに対して恋慕を仕掛けるとは何事で御座る。

［早野蒸気（華族家来）→医者（I）姫かたり］

○ハイ、今お内儀（かみ）さんが用があるといふから、直ぐと此方へ参りましたでがす。

［権助→御新造（III）お文様］

■第VIグループの指定表現体系

男性＝だ・です・でございます・でげす・である・でがす・でございます・でえ（×じゃ・×ござる）

女性＝だ・です・でございます

2-7　第Ⅶグループ（その他使われる立場の人物）の指定表現

【表10】第Ⅶグループの指定表現

男性→男性

聞き手 / 指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ			48	3	7	17		75
です		1	62		1	1		65
でございます			62		1			63
でげす		1	*107*	1	4	1		114
であります			*4*					4
でございます			*1*					1
でござる				*1*				1
だす						*5*		5
でおます						*1*		1
計	0	2	284	5	13	25		329

男性→女性

聞き手 / 指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ		1	8	26	5	1	28	69
です			1	24		4		29
でございます		1	2	7	1	1		12
でげす		1	41	12	4	2		60
であります						1		1
でございます					1			1
計	0	3	52	69	11	9	28	172

女性→男性

聞き手 / 指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
だ							11	11
です							1	1
計	0	0	0	0	0	0	12	12

女性→女性

聞き手 / 指定表現	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ	Ⅵ	Ⅶ	計
です				2				2
でございます				1				1
計	0	0	0	3	0	0	0	3

男性は表現の種類は決して多い方ではないが、「でげす」の用例が非常に多く得られた。女性には特徴はみられない。

○チヨイと松本先生の御別荘が立派に出来ましたやうな訳でげして、

［一八（たいこもち）→若旦那（Ⅲ）恵方詣］

○私が躰を定めると其芸が始められるので有ります。

［一八（たいこもち）→旦那（Ⅲ）旅順の釣上げ］

○貴郎（あなた）がハハハと笑つてチンチン退治を成さる覚召で御坐りませう。

［一八（たいこもち）→若旦那（Ⅲ）幇間針］

○斯う斯う云ふ訳で御坐る。

［一八（たいこもち）→乙（Ⅴ長屋の住人）幇間針］

なお、「だす・でおます」はともに話し手が上方方言の使用者に設定されている、例外的な用法である。

○ハイ、私（わし）アおさかの桂文枝チウ落語家（はなしか）の孫だす。

［孫（芸人の子）→円朝（Ⅶ芸人）通夜の饒舌］

○ハイ、私（わし）ア直き昨日死んだでおます……

［孫（芸人の子）→円朝（Ⅶ芸人）通夜の饒舌］

■第Ⅶグループの指定表現体系

男性＝だ・です・でございます・でげす・であります・でございます・でござる・（×だす・×でおます）

女性＝だ・です・でございます

3　まとめ

以上、各グループの指定表現について考察してきたが、グループによって使用する指定表現の違いが少なからずあることが明らかになった。このことは、指定表現の使い方をみることによって、その話し手の社会的な位置づけを推定することができるということにもなるだろう。例えば、今回扱わなかったH（その他）グループの指定表現の使い方を個々に調べていくことによって、どのグループに近い人物として設定されているのかが判断できるかと思う。

また、全体を通じて男性よりも女性の指定表現の種類が実に少ないということも明らかになった。どのグループもほとんど「だ・です・でございます」しか用

いておらず、この３種類以外は全部合わせてもわずか４例しかない。もちろん女性のデータが男性のものよりもはるかに少ない（男性 4485 例／女性 906 例）のも原因の一つであるが、女性らしさを表現するための指定表現が、この時期に消滅しつつあった、あるいはほぼ消滅していたと推察できる。『安愚楽鍋』の調査結果では女性特有の指定表現が確かに存在した（注７）ようだが、明治中～後期には、女性らしさは特有の指定表現ではなく、現代語と同じように敬語表現や終助詞に表れるようになっていたのではあるまいか。この点については他の資料を調べて確認してみる必要がある。

本稿では各指定表現の敬意の度合い、および各グループが他のグループに対して用いる指定表現の傾向までは言及できなかった。今後の課題としてさらに考察を続けていきたいと思っている。

４　おわりに～方法の問題点

「１-2 分析方法」でもふれたが、本稿で試みた方法は「『だ』は『です・であります』よりも敬意の度合いが低い」という仮定に基づいて数値を出してある。この仮定は普段の我々の日常生活から考えればわざわざ証明するまでもない自明のことであるかもしれないが、客観的な分析を行うためにはやはりこの仮定が正しいという明確な根拠が必要である。それを証明するためには、例えば人物の上下関係を何かの基準でもって固定し、目上には「だ」を使わない傾向が強い、という数値を出してみることが考えられるが、その人物分類の基準に根拠がなければ同じ矛盾が生じることになる。

また本稿では登場人物を単純に階層や職業によって分類したが、各人物間の関係、例えば未知の関係か、既知の関係か、身内なのかそうでないのかなども考慮して数値を修正していく必要があろう。

いずれにせよ、より客観的な数値を出す方法を今後も模索していかねばならない。

《注》

（１）　落語速記の言語資料としての適性について、否定的見解として清水 1983（「『牡丹燈籠』速記には表現上の不統一や変更が多く、速記本文章作成の段階で手直しされた可能性がある」）がある。一方、肯定的見解としては山本 1962（「速記者の書き添え文章はあるにせよ、八、九分どおりは口演のまま文章にできたであろう」）、金沢 1991（「『怪談牡丹燈籠』をはじめとする速記資料が東京語研究の上で果たした役割を考えれば、資料の詳細な検討は今後の研究を待つにしても一定の評価は与えてよい」）がある。

（２）　初出の雑誌名とその号数については、底本を直接参照されたい。

（３）　山崎 1963・1990、小島 1974 の方法は言葉の分類の根拠が明確でなく、話し手や聞き手の違いによる差も考慮されていない。櫻井 1966 の方法は人物分類の根拠は

明らかであるが、分析の際に話し手による差が考慮されていないようである。また、飛田 1970、鈴木 1973 のような士農工商を基準に人物分類を行う方法は明治時代初期には有効であるかもしれないが、そのようなはっきりとした身分制の存在しない明治中～後期に同じ分類基準を設けるのは無理があるだろう。

（4） 例えば「でない・でありません」を数に入れてしまうと、「ではない・ではありません」などの助詞の付いた形も考慮せねばならなくなる。しかしこの形は「指定表現＋否定」として処理するには疑問がある。また「じゃない」についてはその肯定が「じゃ」と単純に決められない。以上の理由で「指定＋否定」形は今回の分析から除外した。

（5） 「だから・ですから」「だが・ですが」の形は、「だ・です」と同様に話し手の敬意の度合いが普通に反映されると考えられるだけでなく、「でございますから・じゃから」「でございますが・じゃが」の出現も十分期待できるため、分析の対象とした。

（6） 用例は「だ・です・でございます」以外の各指定表現で、最も数値の高かったもの（表中斜体下線のもの）を挙げた。各用例は初出雑誌とつきあわせ、引用する際は雑誌の表記を尊重したが、以下の点については改めた。

〈漢字〉旧字体は新字体に改めた。〈異体字・変体仮名〉通行の字体に改めた。
〈振り仮名〉読みにくいもの以外は省略した。〈句読点〉適宜補った。
〈踊り字〉踊り字は用いず、それぞれ該当する語を当てた。
なお、用例中の下線は寺田が付したものである。

（7） 飛田 1970 の作成した『安愚楽鍋』指定表現の一覧表によると、女性特有の表現として「です・ざんす・ざます・だます」があるという。うち、「ざんす・ざます・だます」は娼妓・新造・番新（遊女）にしかみられない表現であるとしている。

《参考文献》

金沢裕之（1991）「明治期大阪語資料としての落語速記本とＳＰレコード～指定表現を中心に」、国語学 167
小島俊夫（1974）『後期江戸ことばの敬語体系』、笠間書院
櫻井光昭（1966）『今昔物語集の語法の研究』、明治書院
清水康行（1988）「東京語の録音資料～落語・演説レコードを中心として」、国語と国文学 65-11
鈴木英夫（1973）「『安愚楽鍋』の語法」、共立女子短大紀要 17
飛田良文（1970）「明治期東京語の指定表現体系－方言と社会構造との関係」、『方言研究の問題点』所収、明治書院
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究　近世篇』、武蔵野書院
――――（1990）『続国語待遇表現体系の研究』、武蔵野書院
山本正秀（1962）「三遊亭円朝の人情話速記本とその影響」、言語生活 132